

# ふるさと探訪

## 坂城でたどる太平洋戦争

1945 → 2025  
戦後 80 年  
特集  
Vol.1

2025 年は、太平洋戦争の終戦から 80 年となる節目の年です。今回は、坂城町に残る戦争の記憶を探訪します。

**第二次世界大戦と太平洋戦争**  
最初に、第二次世界大戦と太平洋戦争について見てみましょう。

第二次世界大戦は、1939（昭和14）年に当時のドイツがポーランドに侵攻したことから始まった戦争です。多くの国が参戦し、ヨーロッパを始め様々な地域で戦闘が起きました。このうち、アジア・太平洋方面で起こった、日本と中国・アメリカ・イギリス・オランダなどの連合軍との戦争が太平洋戦争です。

1941（昭和16）年12月8日、日本のハワイ真珠湾攻撃とマレー半島上陸によって太平洋戦争は開戦しました。当初、戦況は日本に有利でしたが、1942（昭和17）年のミッドウエー海戦から連合軍の反撃が始まります。以降、日本は敗戦を重ねていきました。

1943（昭和18）年、兵力不足を補うために学徒動員が決定されます。これにより、それまで徴兵を猶

予されていた大学生や旧専門学校生が、卒業を繰り上げたり学業を中断したりして戦地へと赴くことになりました。

1944（昭和19）年、日本軍は重要な拠点の一つであったサイパン島を失います。同時に、マリアナ沖海戦で日本海軍の連合艦隊がアメリカ軍に対して大敗北を喫しました。この地域の制空権・制海権を得たアメリカ軍は、日本本土への空襲を開始します。空襲の被害を逃れるため、日本では都市部の学童が地方へ集団で疎開する学童疎開が始まりました。

本土への攻撃は、翌1945（昭和20）年にかけてさらに激しくなっていく、大都市だけでなく地方も空襲によって大きな被害を受けるようになりました。幸い、坂城地域に大きな空襲はありませんでしたが、上田市や長野市では空襲被害が記録されています。4月には沖縄にアメリカ軍が

上陸し、民間人を巻き込んで激しい地上戦となりました。そして、8月6日に広島、同9日に長崎に原子爆弾が投下されます。8月15日に日本はポツダム宣言を受諾、9月2日に降伏文書に署名し、太平洋戦争は終結しました。

### 戦時下の生活

さて、太平洋戦争下の日本国内はどのような状況だったのでしょうか。

太平洋戦争が始まったとき、日本は中国との戦争（日中戦争）のさなかでした。国民は戦争を支持し協力するべきである、という国民精神総動員運動が押し進められ、言論や思想も統制されていきました。また、戦争遂行のために軍需品の生産が優先されたことで、生活物資も不足しがちでした。太平洋戦争の開戦前に、東京、大阪、名古屋などの大都市部では綿製品やガソリン、砂糖、マッチ、米などが配給制となっています。人々

の生活にはすでに様々な制限が及んでいたのです。

こうした制限や物資の不足は、太平洋戦争が始まってからますます厳しいものになっていきました。祝い事や娯楽を自粛する動きが広がり、節約・倹約が励行されました。人手不足も深刻で、女性や子供たちも軍需工場に勤労奉仕に行ったり、食料生産のため農作業に従事することになりました。



現在の坂城駅  
(坂城近隣の町村で召集された兵士は、坂城駅から列車に乗って出征して行きました。)

### 戦争と教育

戦時下では、学校教育も大きな影響を受けました。

1941（昭和16）年、明治期に各地に作られた尋常小学校が国民学校へと再編成されます。国民学校では、心身を鍛えて国と天皇のために尽くすことが求められました。授業は、時局教育や団体訓練、科学、銃剣訓練や看護訓練といった戦争に役立つものが重視されました。教科書の内容も戦争や兵士の活躍を題材にしたものが多く、いわゆる「軍国教育」が推し進められたのです。

こうした情勢は、坂城でも例外ではありませんでした。当時の坂城は、坂城町と中之条村、南条村、村上村の1町3村で、それぞれ



格致学校跡地周辺  
(現在は集合住宅が建っています。校舎の東側が一段高くなっており、この土手を利用して防空壕がつくられていたそうです。)

に尋常小学校が置かれていたが、これらは坂城国民学校、中之条国民学校、南条国民学校、村上国民学校として新たに発足することになりました。各学校に残る記録には、座学のほかに木出しや草刈りなどの勤



格致学校跡地に建てられた記念碑  
(移築前は、国道18号線の坂城IC入口の信号を入ったところにありました。)

労奉仕、団体訓練、鍛錬遠足といった奉仕活動や行事が見られます。また、空襲に備えた防空訓練もありました。中之条国民学校（旧格致学校）では、校舎の東側に防空壕が作られ、空襲の際にはそこへ逃げるよう訓練が行われたそうです。

このほかに、出征する兵士の見送りや、戦地へ送る慰問品の作成、戦死した兵士の出迎えも行われました。

### 学童疎開

学童疎開が始まると、長野県は積極的に疎開児童の受け入れに協力しました。坂城では、坂城・南条・村上の各国民学校で、東京都の豊島区や足立区から疎開してきた児童たちを受け入れられました。親元を離れての疎開生活は、決して楽なものではありませんでしたが、疎開児童と地元住民との交流も多かったようです。当時疎開していた方々と坂城町の交流は、終戦後も続きました。現在、町内の各小



坂城小学校に建てられた学童疎開の碑

学校には、学童疎開の記憶を後世に伝える『学童疎開の碑』が建てられています。

### 物資の不足を補う技術

土木遺産にも認定されている昭和橋も、実は戦争と無関係ではありません。現在の昭和橋は、ローゼ橋というアーチタイプの橋です。コンクリートで作られているため、コンクリートローゼ橋と呼ばれます。コンクリートによるローゼ橋の設計は、中島武技師によって考案された世界初の技術で



現在の昭和橋

ですが、この技術が生み出された背景には、戦争による鋼材不足がありました。中島技師がこの技術を考案したのは太平洋戦争が始まる前の1933（昭和8）年で、当時からすでに物資不足となっていた日本の状況が窺えます。

### 終戦と鎮魂

1945（昭和20）年8月15日、日本は終戦を迎えます。戦後しばらくして、各地では犠牲者を悼む碑が建立されました。坂城町内にも、鎮魂碑や招魂碑がいくつも見られます。

終戦から80年の時間が経ちますが、私たちが日ごろ目にする坂城町の風景の中に、戦争の記憶は残されているのです。

(篠井ちひろ)



坂城神社の招魂碑